

# 100年前のパリの音楽

19世紀に華を咲かせた音楽家

1800年代後半のパリは百花繚乱、著名な音楽家が活躍した。



シャルル・グノー  
(1818~1893)



セザール・フランク  
(1822~1890)



ジョルジュ・ビゼー  
(1838~1875)



ガブリエル・フォーレ  
(1845~1924)

20世紀初頭に活躍した音楽家

カミュ・サン=サーンス(1835~1921)



クロード・ドビュッシー  
(1862~1918)



20世紀初頭は老サン=サーンスのあとドビュッシーの活躍が目立っている。

同時代のダンディーは師フランクの衣鉢を継いで地味ながら着実な功績を残した。1897年パリにスコラ・カントルムを設立し多くの後身を育てた。

ヴァンサン・ダンディー  
(1851~1931)



ガブリエル・フォーレ(1845~1924)

パリ古典宗教学音楽学校に入学し、サン=サーンスの教えを受ける。サン=サーンスとは師弟の関係を越え生涯親密な交友を続ける。



サン=サーンス

フォーレの作品は年齢を経るにしたがって作風が変化していったと指摘されるが、洗練された和声進行に基く流麗なメロディーは、彼特有の抒情性を一貫して包含し続けている。多岐にわたる作品のジャンルのなかで、軽しい数の歌曲とピアノ曲にその抒情性がよく表れている。

フォーレは1896年パリ音楽院の作曲法と対位法の教授に就任、1905年には院長となった。彼の門下からラヴェル、フロラン・シュミット、エネスク、オーベール、ナディアとリリ・ブーランジェ姉妹、デュカス等々錚々たる音楽家を輩出している。フランス音楽史上最も優れた教師といえよう。



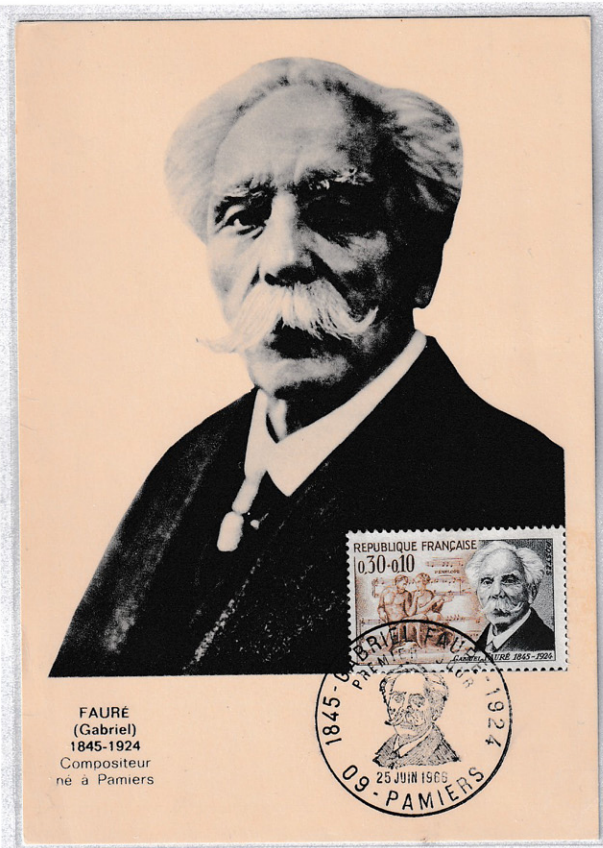
フォーレとラヴェル



フロラン・シュミット



エネスク

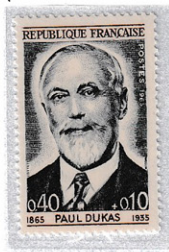


FAURE  
(Gabriel)  
1845-1924  
Compositeur  
né à Pamiers

フォーレ、1966年著名人シリーズ



ナディアとリリ・ブーランジェ姉妹



デュカ

《レクイエム》(1892年作)

フォーレの数ある作品のなかで最高傑作にあげられる。深いカトリック信仰から生れた静謐で高雅な音楽性は死者を弔う気持ちに溢れている。モーツァルト、ヴェルディとともに三大レクイエムの1曲に数えられる。



モーツァルト



ヴェルディ

アンドレ・メサジエ(1853~1929)

パリ古典宗教学音楽学校でサン=サーンス、フォーレに作曲法、対位法を学ぶ。作品はオペレッタ、劇音楽、バレエ曲などが本国はもとより外国で演奏される機会は極めて少ない。



メサジエ生誕150年

メサジエは1907~14年パリ・オペラ座の音楽監督兼首席指揮者を務め劇場の発展に貢献した。オペラ座の隆盛は続くかと思われたが、1914年第一次世界大戦が始まり劇場運営は困難となって彼は役職を離れねばならなかった。



建築家シャルル・ガルニエ



パリ・オペラ座



同

パリ・オペラ座はガルニエによって建築され、1875年1月5日華々しくオープンした。爾来世界で最も華麗、かつ最高水準の上演を誇るオペラハウスとして知られている。座席数1663席。しかし1989年7月13日バステューヌ新オペラハウスがオープンし演目を二分している。名称もバレ・ガルニエ(ガルニエ宮殿)と呼ばれるようになった。

メサジエは在任中新鮮なレパートリーを組むことに力を入れた。なかでもワーグナーの楽劇の紹介に努め、自らの指揮により《ニーベルングの指輪》、《バルジファル》などを初演した。



《ニーベルングの指輪》より  
《ラインの黄金》(第1幕)



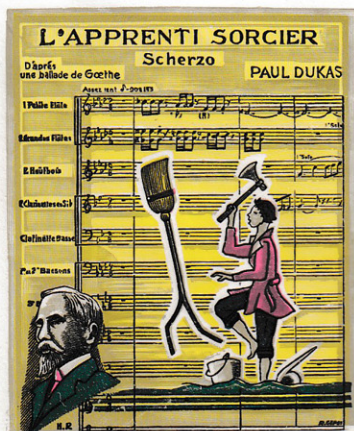
同  
《ジークフリート》(第2幕)



《バルジファル》(第3幕)

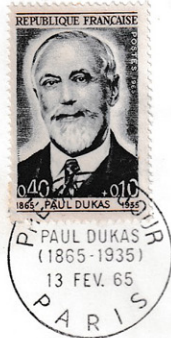
ポール・デュカ(またはデュカス)(1865~1935)

パリ音楽院に学ぶ。作品は歌劇、交響曲、ピアノ曲、歌曲など多彩だが、ゲーテのバラードによる1897年の交響詩《魔法使いの弟子》一作によって一躍彼の名は世界的に知られるようになった。



カシエの楽譜は《魔法使いの弟子》の総譜

PREMIER JOUR  
D'ÉMISSION  
FIRST DAY COVER



FIRST DAY COVER

ウォルト・ディズニーは音楽映画《ファンタジア》でミッキー・マウスに魔法使いの弟子を演じさせた。

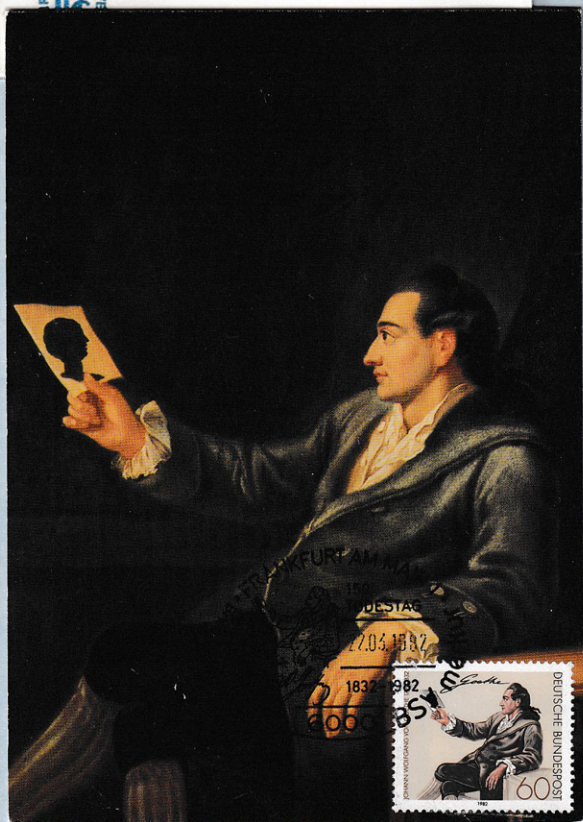


ミッキーは箒に水汲みを命じる



箒は水汲みを始める

《魔法使いの弟子》  
の原作者ゲーテ



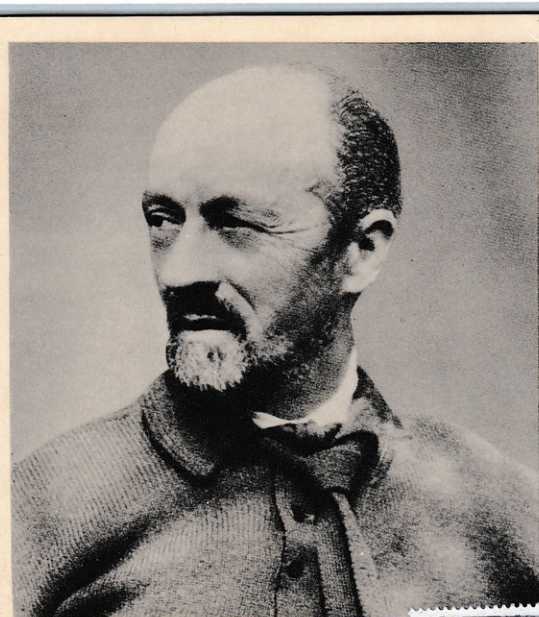
## アルベール・ルーセル(1869~1937)

ルーセルは当初海軍士官として活動を開始したが、健康上の理由で音楽の道に転向する。1898年バリのスコラ・カントルムに入学し、ダンディの教えを受ける。

代表作は舞台音楽《くもの饗宴》、《バックスとアリアーナ》の他、器楽作品、ピアノ曲、声楽曲などがあるが、母国フランス以外で演奏される機会はあまり多くない。

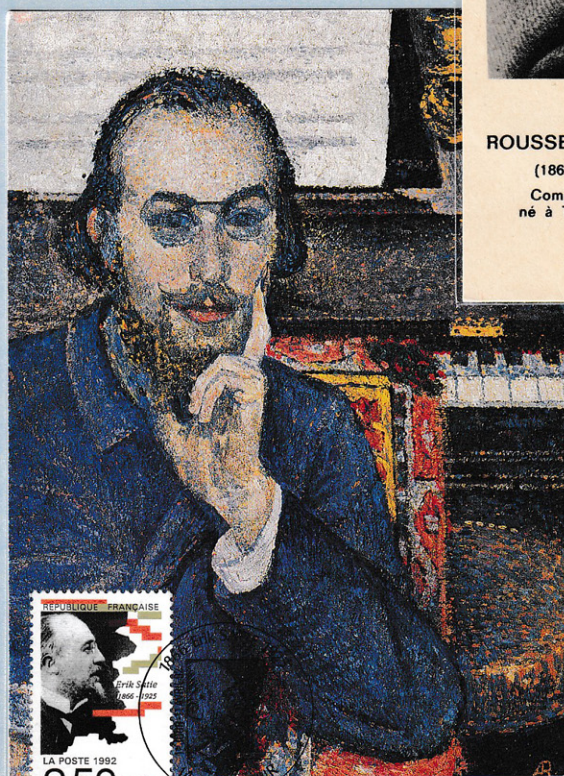
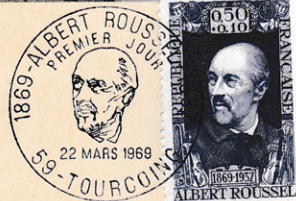


バックスとアリアドネ  
ティツィアーノ作  
ルーセルの代表作《バックスとアリアーナ》の同じ題材によるバロック画。



ROUSSEL (Albert)

(1869-1937)

Compositeur  
né à Tourcoing

## エリック・サティ(1866~1925)

1883年パリ音楽院(コンセルヴァトワール)に入学するが、アカデミックな空気を嫌い退学。以後独自の書法で次々に作品を発表する。40歳でスコラ・カントルムに入学しルーセルの指導を受ける。作品は圧倒的にピアノの小品が多いが、奇妙な題名と特異な楽風で世間から注目される。



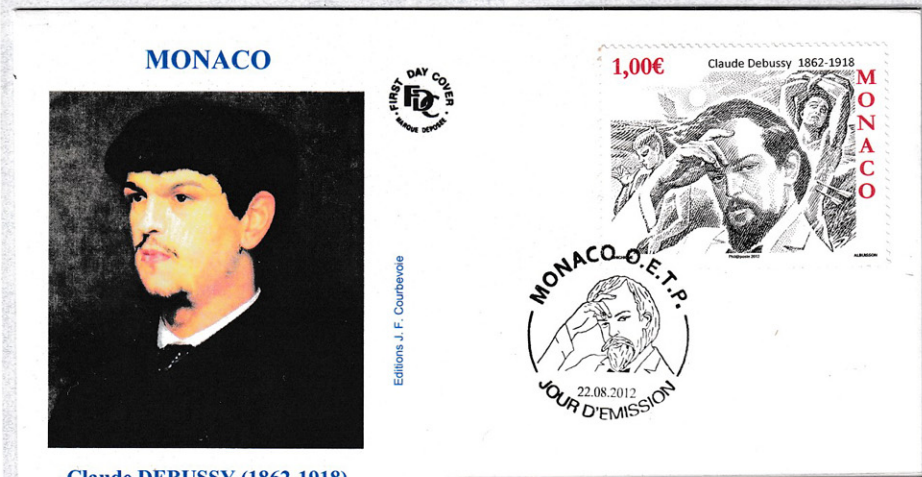
## イーゴル・ストラヴィンスキー

(1882~1971)

ピカソ画

サティが試みた頻りに拍子に変化する変拍子書法は、ストラヴィンスキーに大きな影響を与えた。特に《春の祭典》にその例を見ることができる。

クロード・ドビュッシー (1862~1918) 19世紀末から20世紀初頭にかけて活躍したフランス印象派を代表する作曲家。  
《牧神の午後への前奏曲》 象徴派の詩人マラルメの詩に基いて1894年に作られ、ドビュッシーの名を一躍有名にした不朽の名作。



ドビュッシー 生誕150年 背後で踊るニンジスキー



ドビュッシー と 牧神

詩人ステファヌ・マラルメ



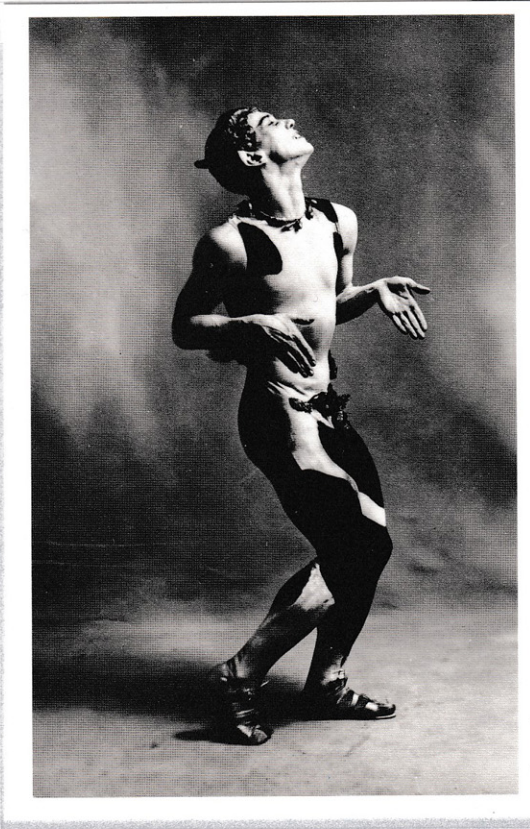
ディアギレフ

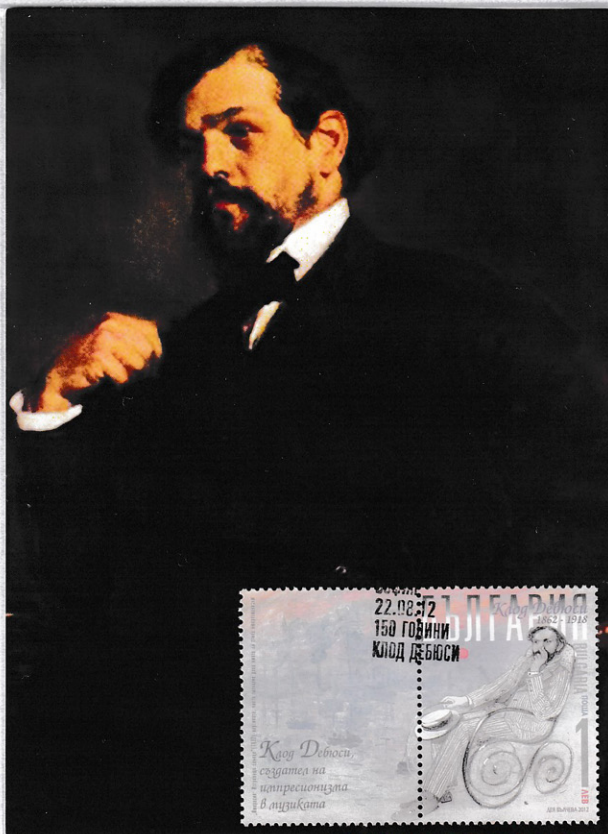


ニンジスキーの彫像

バレエリュス(ロシア・バレエ団)を率いるディアギレフは1912年ニンジスキー振付、主演により《牧神》をバレエ化した。ニンジスキーはバレエ史上初めて横歩きをして鋭く批判された。

牧神のニンジスキー





ドビュッシー 生誕150年

## 第3幕

メリザンドは塔の窓から髪のをたらしてベレアスに触れさせる。



ドビュッシーとベレアスとメリザンド

《ベレアスとメリザンド》(1902年)ドビュッシーが完成した唯一のオペラ。ワーグナー以後の20世紀初頭を飾る代表的作品。ドビュッシーはマーテルリンクの戯曲をオペラ台本化せずそのまま作曲した。



マーテルリンク



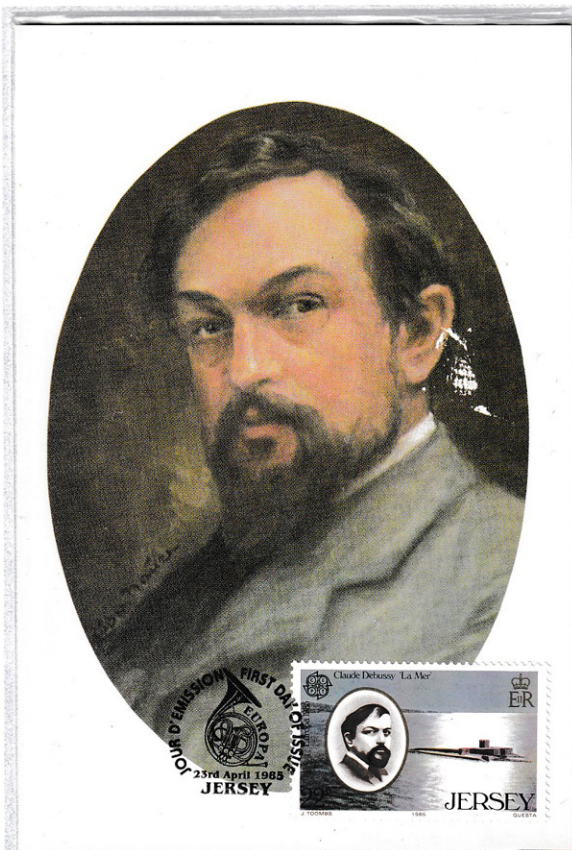
ベレアスとメリザンド



## メサジェ

オペラ・コミック座の総監督メサジェは初演の指揮を担当し、ドビュッシーに積極的に協力した。





ドビュッシー とジャージー島の海



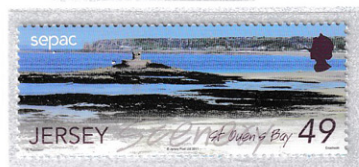
北斎と「富岳三十六景」より『神奈川沖の浦浪』  
ドビュッシーは北斎の版画を所有し、その一部を《海》の  
初版総譜の表紙に用いた。  
しかし《海》の成立と北斎の版画と直接の関わりはない。

《海》の初版総譜の表紙  
パリ・デュラン社

三つの交響的素描《海》(1905年)  
三つの素描 Trois esquisses とは何を意味する  
のだろうか。I「海の夜明けから正午まで」、II  
「波の戯れ」、III「風と海との対話」とそれぞれ  
タイトルを持つ三楽章からなるが決して描写音楽  
ではない。動機、調性、和音を極めて高度に処理  
したドビュッシー独自の世界を構築した傑作。



ドビュッシー



ジャージー島の海

ドビュッシーは、後に3番目の妻となるエンマ・パル  
ダックとともにジャージー島に滞在し、《海》のオー  
ケストレーションを仕上げた。





# ラヴェル

モーリス・ラヴェル(1875~1937) ドビュッシーとともに20世紀初頭フランスを代表する作曲家。オペラ、バレエ曲、管弦楽曲、協奏曲、室内楽、ピアノ曲、歌曲など広い範囲で名曲を残した。



1875 - CENTENAIRE - 1975  
DE MAURICE RAVEL

生誕100年記念印、モンフォール-ラモーリ局

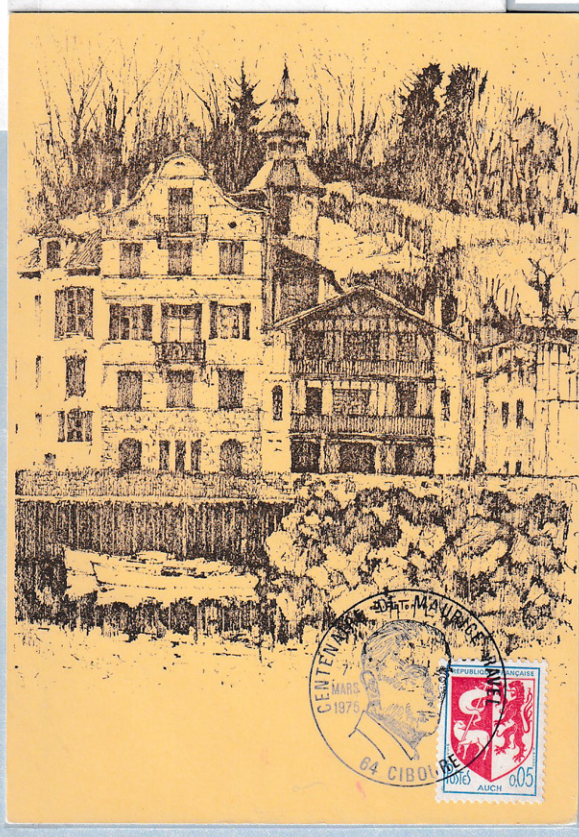


## フォーレ

ラヴェルは1889年パリ音楽院に入学し、フォーレについて作曲法を学んだ。



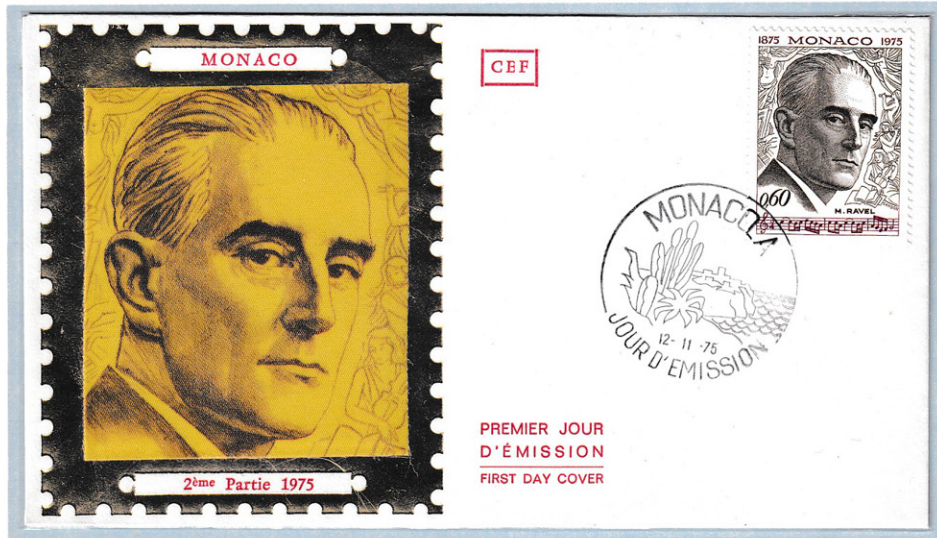
没後50記念印、リヨン局



カードは南仏シブールのラヴェルの生家(中央の三階建)  
記念印は生誕100年、シブール局

バレエ曲《ダフニスとクロエ》(1812年作)

ロシア・バレエ団の主宰者ディアギレフの依頼によって書かれた。ラヴェル前半生の傑作。ギリシャの牧歌的な青年男女の物語。



生誕100年記念カバー、モナコ

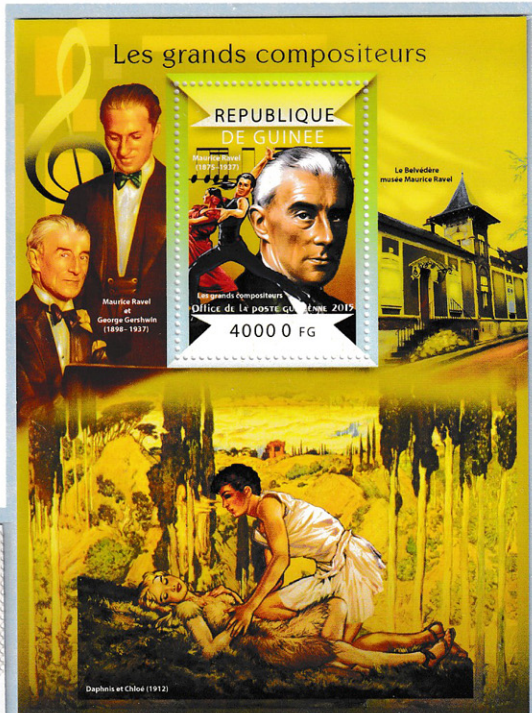


セルゲイ・ディアギレフ



ディアギレフと  
バランシン(振付家)

ガーシュウィン  
とラヴェル



シート下部はダフニスとクロエ



ラヴェル生誕100年記念印、ポルドー局

《高貴で感傷的なワルツ》(1912年)、舞踊詩《ラ・ヴァルス》(1920年)。ラヴェルは終生ウイenna・ワルツを礼賛していた。

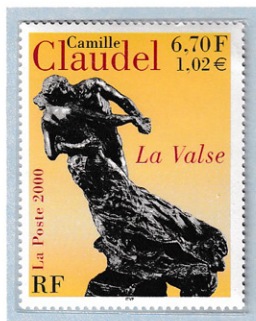


ヨハン・シュトラウスII  
ハプスブルク宮廷舞踏会  
音楽監督

カードは同管弦楽団制服  
の赤い燕尾服



《ラ・ヴァルス》



ラヴェルの親友クロード・ロランの彫像  
《ラ・ヴァルス》の彫像

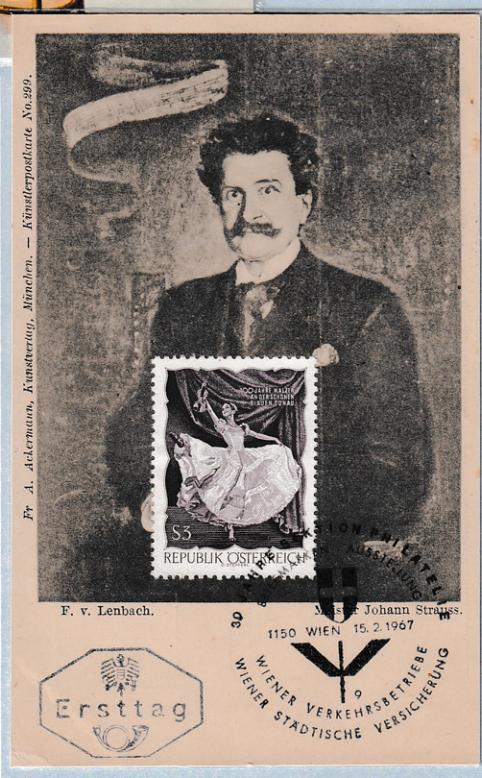


シューベルト

《高貴で感傷的なワルツ》は  
シューベルトの作品を手本とした。



ラヴェル



Pr. A. Ackermann, Kunsterzeug., München. — Kinästpostkarte No. 289.

F. v. Lenbach.

Musik Johann Strauss.

1150 WIEN 15.2.1967



切手はヨハン・シュトラウスII《美しく青きドナウ》100年

《ボレロ》(1928年)、スネアドラム(小太鼓)が繰り返す2小節のリズムパターンにのせてさまざまな楽器が同じメロディーを反復するスペイン風舞曲。楽器法、管弦楽法の極致をしめすラヴェル晩年の最大傑作。



カシエの楽譜は《ボレロ》のピアノ編曲譜



ラヴェルと《ボレロ》の楽譜



スネアドラムは2小節のボレロのリズムを169回繰り返す。

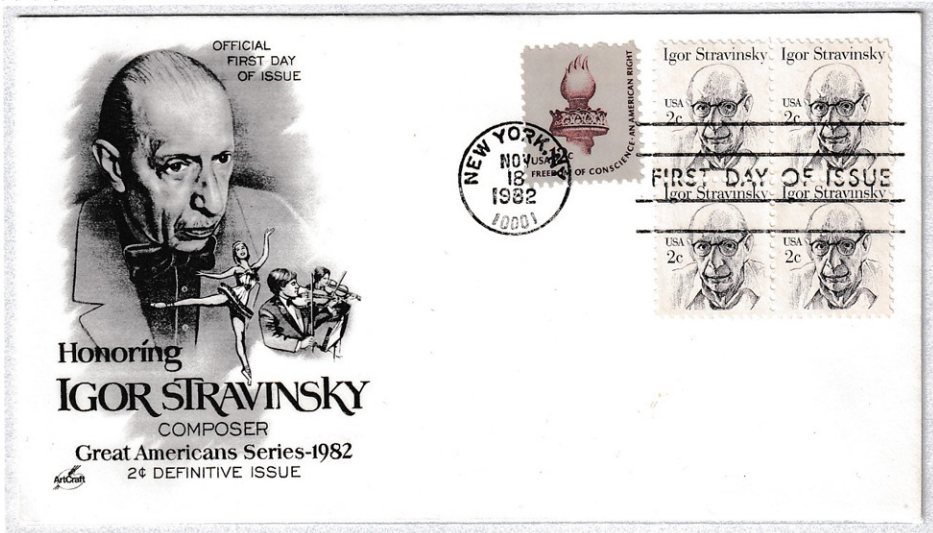
モーリス・ベジヤール振付の《ボレロ》を踊る赤い衣装のダンサー



# ストラヴィンスキー

イーゴル・ストラヴィンスキー (1882~1971)

パリで《火の鳥》(1910)、《ペトルーシュカ》(1911)、《春の祭典》(1913)の三大バレエを発表後、第一次世界大戦、ロシア革命と続いたためストラヴィンスキーは帰国出来ず、パリとスイスに留まらざるをえなかった。



ストラヴィンスキー 1982年『偉大なるアメリカ』シリーズ



### 《春の祭典》3種

《春の祭典》は複雑な変拍子、不規則なリズムとアクセント、複調と不協和音などかつてない強烈な響きの連続で世間に衝撃を与えた。会場は賛成派と反対派激しく対立して大混乱となった。



ロシア兵士と娘たち



//



ヴァイオリンを弾く兵士  
ピカソ画

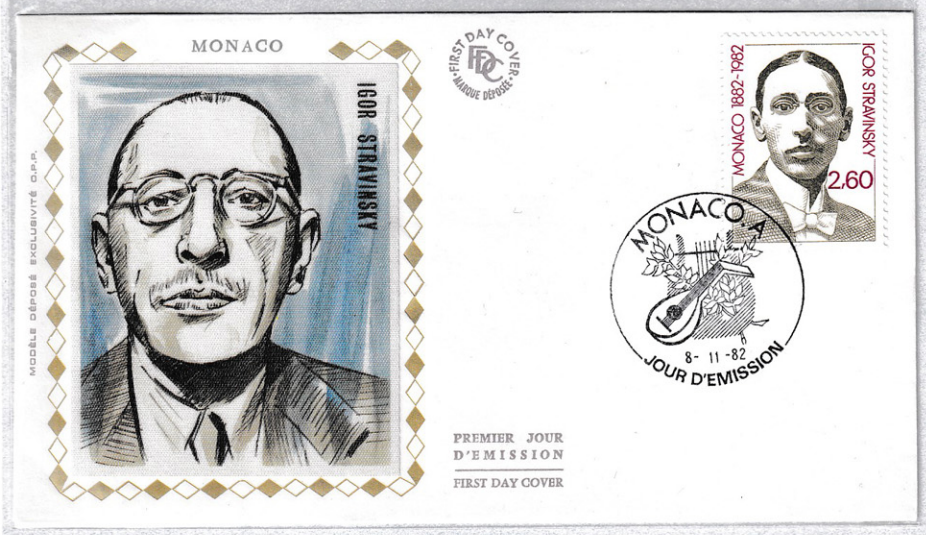
### 《兵士の物語》(1918年)

大戦の影響で本格的なコンサートの開催が困難な状況で、計12名の小編成の演目が創られた。変拍子の連続は《春〜》の名残りが見られる。

物語は休暇で帰省中の兵士が道中で悪魔に出会い、様々な試練を課せられる。兵士はヴァイオリンを弾いて困難を乗り切る。

バレエ音楽《プルチネッタ》(1920年)

18世紀前半にナポリで活躍したジョヴァンニ・バッティスタ・ペルゴレージ(1710~1736)『コメディア・デラルテ』の音楽を素材にしたバレエ曲。ストラヴィンスキー自身が「古典主義への回帰」を掲げた。



ストラヴィンスキー 1982年 生誕100年

『コメディア・デラルテ』の登場人物



プルチネッタ



アレッキーノ



パンタロン



アレッキーノ



ペルゴレージ



左から ストラヴィンスキー  
(ピカソ画)  
ピカソ作初演の舞台  
プルチネッタ  
(無目打ち)



## フランス六人組

1920年バリの音楽評論家アンリ・コレが、ルイ・デュレイ(1888~1979)、アルテュール・オネグル(1892~1955)、ダリウス・ミヨー(1892~1974)、ジェルメーヌ・タイユフェール(1892~1983)、フランシス・プーランク(1899~1963)、ジョルジュ・オーリック(1899~1983)の青年たちのグループを『フランス六人組』と名付けた。彼等はそれぞれ異なった性格と音楽性を持ち、一つの楽派を形成した訳ではないが、反ロマン主義、反印象主義で一致していた。



アンリ・コレ  
音楽評論家、  
『六人組』の名付け親



エリック・サティ  
『六人組』の父親的存在。  
表立って運動を指導した  
訳ではないが、精神的な  
支えとなった。



フランシス・プーランク 1974年著名人シリーズ。

カジェの楽譜は代表作のバレエ音楽《牝鹿》(1923年)のスコア。

プーランクは六人組のなかではオネグルとともに多岐にわたるジャンルの作品をのこした。色彩的でかつ  
明晰な書法、上品なエスプリのきいた音楽が特徴。



オネグル



タイユフェール



オーリック



ドビュッシー

『六人組』のなかではデュレイとタイユフェールの2人は他の4人に比べて名声を得ていない。  
ドビュッシーに代表される『印象主義』には6人とともに反感を持っていた。



アルテュール・オネゲル(1892~1955)

六人組のなかでは最も演奏される作品の数が多い。フランスのルアーブルに生れたが両親がスイス人のため生涯スイス国籍をとおした。19歳の時パリ音楽院に入学、作曲法、対位法、フーガ、指揮法などを学ぶ。他の仲間にしてワグナーに傾倒したことを隠さなかった。その影響が彼の音楽には理論的な面に加えて、ドイツ的な重厚さを感じさせる一面もある。



オネゲル



アンセルメ

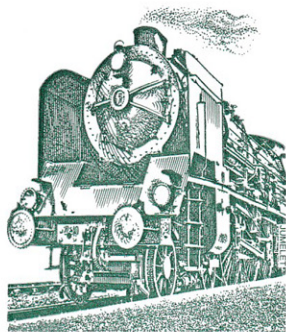


交響的断章《パシフィック231》(1923年)  
彼は生涯異常なほど機関車に興味を示した。書齋には機関車の模型が数多くあったという。この作品は単なる描写音楽ではなく、また印象主義的作品でもない。彼独特の感性による世界を表現している。

《パシフィック231》の総譜はスイスの指揮者エルネスト・アンセルメに献呈された。

## Locomotive à Vapeur

PREMIER JOUR  
D'ÉMISSION  
FIRST DAY COVER



PACIFIC 231 K 8

Edition J.F. Coubevois



機関車『パシフィック231』当時ヨーロッパでは最も速い機関車だった。